

住民の主観的指標に基づく 「地域の活力」の基礎的検討 — 地域イメージの住民心理への影響について —

藤原 昇汰¹・鈴木 春菜²

¹学生会員 山口大学大学院創成科学研究科 (〒755-8611 山口県宇部市常盤台2-16-1)

E-mail: b044ve@yamaguchi-u.ac.jp

²正会員 山口大学大学院創成科学研究科 (〒755-8611 山口県宇部市常盤台2-16-1)

E-mail: suzuki-h@yamaguchi-u.ac.jp

本研究では住の主観的な「地域の活力」を地域イメージとし、その性質と効果について検討した。まず新聞のテキスト分析により地域イメージに関する質問項目を作成し、幸福感等の心理尺度とともにアンケート調査を行った。得られた結果について因子分析を行い5つの因子を抽出した。性質の検討としてパス解析を行った結果、「ソーシャルキャピタルイメージ」「地域アイデンティティ」「地域人口特性」の3つの因子が地域の活力に影響を与える可能性が示された。効果の検討として回帰分析を行った結果、地域の活力は地域愛着に比較的強く影響を与えることが示唆された。また、その因果関係が強化されるには地域の認知が条件となる可能性が示された。

Key Words : 地域の活力, 地域イメージ, 地域愛着

1. はじめに

近年、人口減少に伴う地方都市の衰退が懸念されており、行政を中心として「地域の活力」の増大を目途とした地域活性化事業が行われている。「地域の活力」は比較的新しい言葉である。朝日新聞・読売新聞(全国版)を対象とし、本文か見出しに「地域の活力」が含まれる記事数を過去20年間分調査したところ、2000年代中頃から記事数が増加し、2013年から2015年にかけて比較的多く用いられていた(図-1)。政府による地方創生事業が2014年に発表されたことから使用が増えたと考えられ、「地域の活力」は地域活性化に関する言葉であると想定される。「地域の活力」は地域を生命体として捉えその発展の様態を表現したものである。しかしながら、その内容は詳細に検討されているとは言い難く、キャッチコピー的に用いられてきたと考えられる。社会を生命体として捉える方法は社会有機体説などの社会学で用いられ、地域の活力は社会と市民の関係を考察するにあたって重要な概念であると考えられる。例えば、藤井(2015)¹⁾は社会の生命力が人間に心理的に正の効果を与え及ぼすことを示唆している。これまで、具体的な地方創生事業の目標や評価の多くに、移住者数や住民の所得などこれまでの事業と同様の客観的指標が用いられているが、地域の活力が高まるという事態は、居住や経済的状

況が変わらずとも、人びとのところに影響を及ぼす可能性を有するものとも想定されるのである。

このように、地域の活力を分析することで、地域社会が住民に対して与える心理的影響を検討することができると考えられる。本研究は「地域の活力」の性質、効果を住民の印象等の主観的指標を用いて分析し、住民の主観的な地域の活力が住民の心理に与える影響について基礎的な検討を行うことを目的とする。

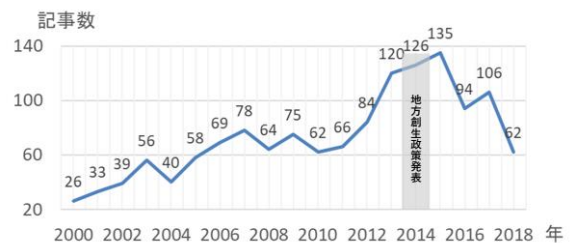


図-1 「地域の活力」を含む記事数(朝日、読売)

2. 地域の活力の位置づけ

「地域の活力」の概念が用いられた研究は少ない。しかし、地域の活力と類似した概念として考えられる「地域力」が存在し、研究されてきた。河上(2005)²⁾は地域力を地域の「ソーシャル・キャピタル(以下、

SC) 」によって支えられた「地域の問題解決能力」「地域の公共(財)とその計画・管理・運営能力」「地域自治の推進力」などのソフト面と公共施設などのハード面を包括した概念であるとしている。また、湯沢(2011)³⁾も地域力を SC によって醸成される地域の問題解決能力とし、その能力を示す組織力、活動力と SC の関係について検討を行っている。これらより地域力は地域のソフト面、ハード面双方を含む複合的な概念であり、特に SC と強く関連付けて考えられてきたといえる。本研究ではこれらの検討を踏まえ、地域の活力をソフト的なもの、ハード的なものを含む複合的な概念であると考ええる。しかし、本研究では地域住民の心理に及ぼす影響を検討することから、地域の活力を住民の主観的な印象が規定するものとし、調査結果からその内容を推定することとした。

住民の地域への印象を分析したものとして地域イメージ研究が存在する。地域イメージとは人々が持つ地域に対する「過去の或る知覚的経験をデータとして、自分が作り上げた対象のパターン」⁴⁾である。このように地域イメージは人々が地域にもつ主観的な印象であると考えられる。石見・田中(1996)⁴⁾は地域の実態と地域イメージが乖離する場合があります、地域イメージは人々の直接経験と間接経験により形成されることを示している。前者は旅行や居住経験によるもの、後者は新聞、雑誌、テレビなどのマス・メディアや知人や親戚などパーソナルなメディアから見聞きしたことによるものである。地域イメージの形成には地域を何らかの仕方を知ること(認知すること)が重要であると考えられる。また、他にも石見・田中(1996)⁴⁾は地域イメージが人々の態度形成に寄与することを示している。具体的には地域イメージの旅行者の旅行先の決定への影響や、地域イメージが良いものとなることで地域住民の帰属意識や連帯感、誇りの醸成が促されることが示されており、地域イメージが地域内外の人々の心理に影響を与えると想定されるであろう。

そこで本研究では住民の主観的な地域の活力(Subjective Regional Vitality:SRV)を地域イメージであると考え、これまで述べた通り、住民が何らかの形で地域を知り地域イメージを形成する。そして、地域イメージが住民の心理に影響を与える。本研究では、形成された地域資源等に関する地域イメージがSRVの形成に影響を及ぼし、SRVが地域住民の心理に影響を及ぼすという因果関係を推定する。SRVが他の地域イメージから受ける影響についての検討をSRVの性質の検討、SRVが住民の心理へ与える影響の検討をSRVの効果の検討とし、以下の手順で検討を行うこととした。まず、住民の主観的な地域の活力を表す地域の活力に関する尺度と、地域全体に対する主観的指標である地域イメージの尺度を作成

した。次に、アンケート調査を実施して各尺度と住民の幸福や地域愛着、健康感等の心理的尺度を測定した。得られたデータを分析し、SRVの性質の検討とSRVの各心理尺度及ぼす影響について検討した。加えて、地域イメージの形成には人々が地域を認知しているか否かが一つの要因となることを踏まえて、住民の地域の認知度が推定した因果関係に与える影響について検討を行った。

3. SRV、地域イメージ尺度候補項目の検討

SRVとそれに影響を及ぼすことを想定する地域イメージの尺度の候補項目を検討を行った。前述の通り、本研究ではSRVも地域イメージ尺度として捉えるが、便宜的に以後では後者を地域イメージ尺度と呼称することとする。項目のスクリーニングとして新聞記事の計量テキスト分析⁷⁾を行い候補項目に用いる語を抽出した。新聞の記事を用いることで、住民のイメージの形成に影響を及ぼすような世間で一般的に使われている語を抽出することが可能であると考えられる。例えば、樋口(2011)⁹⁾は全国紙の分析をもとに社会意識を一定程度まで検討することが可能であることを示している。社会意識とは「ある社会集団の成員の共有されている意識」(見田(1979)⁸⁾)であり、新聞記事のテキストを分析することにより人々の間で共有されている語を取り出すことが可能であると考えた。計量テキスト分析の際は、樋口(2006)⁷⁾に従って、まず膨大なデータからコンピューターを用いた量的分析により特徴的な語を抽出した。その後、抽出された語の文中での用いられ方を参考にし、抽出された語の一般的な使用方法から筆者らの判断により尺度候補項目を作成した。以下に具体的な方法を示す。

テキスト分析には「KHCoder」を用いた。分析対象は朝日新聞(1985/1~2018/9)と読売新聞(1987/10~2018/9)とし、見出ししか本文に「地域の活力」を含む記事を取り出した。取り出した文章データに関して形態素解析、複合語の処理を行った後で、語を抽出した。抽出された語は524,406語であった。

得られた記事データから、Jaccard係数と距離のスコア(表-2)の2つの指標を用いて「地域の活力」と関連の強い語を抽出した。Jaccard係数によって記事単位で地域の活力と関連の強い語を、距離のスコアによって文章単位で関連の強い語を抽出できると考えられる。Jaccard係

表-2 Jaccard係数、距離のスコアについて

Jaccard 係数	$\frac{a}{F_1 + F_2 - a}$	a=ある語2が語1の前後に出現した回数 F ₁ =語1がデータ全体に出現した回数 F ₂ =ある語2がデータ全体に出現した回数
距離のスコア	$\sum_{i=1}^5 \frac{(l_i + r_i)}{i}$	l ₁ =ある語2が語1の直前に出現した回数 l ₂ =ある語2が語1の2つ前に出現した回数 r ₁ =ある語2が語1の直後に出現した回数 r ₂ =ある語2が語1の2つ後に出現した回数

数のみでは比較的頻出度の高い語のみを取り扱うこととなると考え、2つの指標を併せて用いることで、より網羅的な抽出を行えると考えた。各語に関して、それぞれの指標値を算出した。次に、それぞれの指標値が高い語に関してさらに距離のスコアを用い、その語の周辺で多く使われている語を抽出した。Jaccard係数の上位25語、距離スコアの上位5語に関してこの処理を行った。前者は後者と比較して記事全体を対象とした指標であり、多様性のある、特徴的な語を多く抽出することが可能であると考え、扱う語数を定めた。また、質問数が多くなりすぎないように、扱う語数を調整した。最後に距離のスコアによって抽出された語の周辺の文章を確認し、筆者らの判断で地域イメージ尺度の候補となる項目を作成した。

作成した項目を表-3に示す。SRVを示す項目は「地域に活力がある」「地域に力がある」の2項目とした。地域イメージ尺度候補項目はSRV以外の項目(46項目)に地域の変化に関する3項目を追加した。1で述べたように地域の活力は地域を生命体とした捉えた表現である。同様の類推を行った学説の社会有機体説⁹⁾では社会を外部環境との調整を行い、変化、発展する主体(生命)であると考え。社会を地域社会とするならば、地域社会は変化しながら存在するものであると捉えることが可能であろう。また石見・田中(1996)⁴⁾は地域イメージが地域の実態が変化することに伴い、変遷することを示している。新聞調査では変化に関する項目は得ることができなかったため、地域の変化に関する項目(「まちが変化している」「最近新しい商業施設ができた」「インフラ工事が行われている(最近行われていた)」の3項目)を追加した。

表-3 テキスト分析により作成した項目

地域の活力(SRV)項目	
地域に活力がある	地域に力がある
地域イメージ尺度候補項目	
地域にぎわっている	住民が地域の将来を考えている
若い人が多い	住民が主体的に活動している
人が集まり、交流している	地域に対する信頼がある
人口が多い	市政に信頼がある
高齢者が多い	地域の活動が熱心に行われている
人口減少が進んでいる	NPO活動が行われている
若い人材が流出している	住民同士のつながりがある
地域行政が熱心に福祉に取り組んでいる	地域はこのエリアの中心のまちである
地域行政が熱心に雇用確保に取り組んでいる	地域が誇りをもっている
地域行政が熱心に観光に取り組んでいる	地域の中に多様性がある
医療環境が整備されている	最近災害で大きな被害を受けた
住民と自治体が協働している	小中学校の統廃合が進んでいる
地域間の連携が行われている	地域に特有の文化・芸術がある
道路が整備されている	地域に歴史的景観がある
まちなかが整備されている	放置された空き家が多い
上下水道が整備されている	地域の政治家が熱心に活動している
公共交通が整備されている	選挙の投票率が高い
長距離の移動手段が確保されている	地域のプロスポーツチームがある
県内での就職が多い	祭りが行われている
この地域の賃金の水準は生活するのに十分だ	地域に百貨店がある
地域特有の商店がある	地域の図書館が多く利用されている
地域特有の産業がある	地域にぎわっている道の駅がある
地域資源を活用した産業がある	耕作放棄地や放置森林が多い
※変化の要素を加味し、追加した項目	
まちが変化している	インフラの工事が行われている
最近新しい商業施設ができた	(最近行われていた)

4. アンケート調査概要

4.1. 調査の概要

WEBアンケート調査を2018年12月に実施した。回答者は、都市部(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、京都府、大阪府、愛知県)と地方部(都市部以外)の2地域、20歳から69歳までの5年代(20代:20-29歳など)、性別(男女)の20セグメントにそれぞれ30人ずつとし、合計600人とした。

4.2. 調査項目

質問項目は3で作成したSRV、地域イメージと幸福感、健康、地域愛着である。

まず、SRV、地域イメージ尺度候補項目に関してはそれぞれの質問項目に対して、回答者が在住する地域に当てはまる度合いを1:全くそう思わないから5:とてもそう思うの5件法にて尋ねた。

続いて、幸福感と健康感、地域愛着を住民の心理的側面として測定した。幸福感に関してはQoLやWell-Beingなど様々な概念が存在するが、それぞれ社会的環境の影響を受けることが報告されており(例えば林・土井・杉山(2004)⁹⁾、北川・鈴木・藤井(2011)¹⁰⁾、地域社会と住民の関係性を検討する上で重要なものと考え採用した。また、健康感と地域愛着についても社会的環境との関連が指摘されており(例えば藤南・園田・大野(1995)¹¹⁾、引地・青木・大淵(2009)¹²⁾)、SRVを含む地域イメージとの関係性を検討するため測定を行った。以下にそれぞれについて採用した尺度について述べる。

幸福感については住民の日常生活における幸福感を測定することが可能な概念を用いることが望ましいように考えられる。地域住民にとって「地域」は日常的なものであり、地域の活力や地域への印象はその「地域」と関連するものであると考えられるからである。これより、本研究では主観的幸福感(Subjective Well-Being; C.f. Kahneman, 1999)¹³⁾概念を用いた。主観的幸福感は「自分の生活の総合的な質について、それが自分の要望や期待とどの程度合致しているかに関わる主観的評価」と定義され、北川(2010)¹⁴⁾は認知的な幸福感と感情的な幸福感に分けられるものとしている。北川はこれらについて質問項目の作成を行っており、認知的な幸福感は生活への満足感尺度(Satisfaction with life scale. 以下SWLS, c.f. Diner, Emmons & Griffin(1985)¹⁵⁾; Pavot & Diener(1993)¹⁶⁾)を和訳し、これを用いている。そして、それぞれ「自分の暮らし」について1:全く当てはまらないから7:よく当てはまるまでの7件法で解答を依頼している。尺度値は各項目の回答値を合計したものである。本研究でも同様の質問項目と回答形式を用いて調査を行った。感情的な幸福感に関する質問項目は形容詞のべ

アを3組ずつ（生活の喜び：「悲しいーうれしい」、
「消極的ー積極的」、生活活性化：「ねむたいーハッキリ」、
「退屈ー活発」、「不快ー快い」）用いており、それぞれ「ここ一カ月の暮らし」について0:全く感じなかった～4:とても頻繁に感じたまでの5件法で被験者尋ねている。それらの回答値から「生活の喜び」（valence）、「生活活性化」（activation）尺度値、生活AWB（Affective Well-Being）値を算出している。生活AWB値は「生活の喜び」値と「生活活性化」値の平均値を算出したものであり、本研究でも同様の質問項目と回答形式、尺度値の算出法を用いた。

健康に関しては住民の心理的な健康感について検討を行うため、主観的健康感を用いた。横山（2015）¹⁷は高齢者に関して活力と主観的健康観が正の相関を持つことを示し「活力あふれる」気分を涵養することが「主観的健康観がよい」という気持ちにつながることを示している。質問項目は横山（2015）¹⁷を参考にし「最近の私は健康であると思う」「最近の私は元気であると思う」とし、それぞれ1:全くそう思わないから5:とてもそう思うの5件法にて尋ねた。

地域愛着は鈴木・藤井（2008）¹⁸が用いた地域愛着度尺度を利用した。これは大谷・芳賀（2003）¹⁹が作成した質問項目を萩原・藤井（2005）²⁰が主成分分析により地域愛着（選好）・地域愛着（感情）・地域愛着（持続願望）に分類したものである。それぞれの質問項目について鈴木・藤井（2008）¹⁸と同様に1：全くそう思わないから5：とてもそう思うまでの5件法で回答を依頼した。

5. データの分析、考察

5.1. SRVに影響を与える地域イメージの検討

調査の結果を用いて、地域イメージ尺度項目の作成を行った。まず、アンケートを実施した候補項目（49項目）の平均値、標準偏差を算出した。天井効果およびフロア効果は確認されなかった。次に、49項目すべてに対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は17.459、3.551、1.979、1.736、1.413、1.305、1.052…というものであり、スクリープロットも参考にし4因子構造が妥当であると判断した。そこで4因子を仮定し再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果に関して因子負荷量0.350を基準にし、それを満たさなかった6項目（表-4）を分析から除外し、再度分析を行った（表-5）。回転前の4因子で43項目の全分散を説明する割合は55.00%であった。第一因子は16項目で構成されているが、項目の意味のまとまりが不十分であると考え再度主因子法により因子分析を行った。固有値の変化は9.229、1.173、0.793、0.669、0.624…というものであり、2因子構造が妥当であると判断した。そこで2因子

表-4 削除した項目

地域行政が熱心に観光に取り組んでいる
まちが変化している
県内での就職が多い
この地域の賃金の水準は生活するのに十分だ
最近災害で大きな被害を受けた
祭りが行われている

表-5 因子分析の結果

項目内容	I	II	III	IV
地域間の連携が行われている	.979	-.371	.148	-.062
住民と自治体が協働している	.958	-.295	.134	-.062
住民が主体的に活動している	.837	.060	-.114	.047
地域の活動が熱心に行われている	.769	.104	-.006	-.008
住民が地域の将来を考えている	.739	.121	-.085	.032
地域行政が熱心に雇用確保に取り組んでいる	.730	-.079	.069	.023
地域行政が熱心に福祉に取り組んでいる	.720	-.154	.113	-.047
住民同士のつながりがある	.670	.133	-.064	-.150
地域の政治家が熱心に活動している	.670	.136	-.118	.020
市政に信頼がある	.667	.086	.079	.051
地域が誇りをもっている	.663	.202	-.047	.008
地域に対する信頼がある	.662	.100	.057	.002
選挙の投票率が高い	.653	.033	-.123	.034
NPO活動が行われている	.546	.277	-.125	.009
地域の中に多様性がある	.438	.256	.057	.144
地域はこのエリアの中心のまちである	.407	.360	-.112	.069
地域特有の産業がある	-.033	.716	.138	-.156
地域ににぎわっている道の駅がある	.009	.672	-.213	-.093
地域に百貨店がある	-.211	.656	.014	.087
地域特有の商店がある	.056	.619	.139	-.069
地域のプロスポーツチームがある	-.114	.615	.027	.051
地域資源を活用した産業がある	.139	.601	.056	-.110
地域に特有の文化・芸術がある	.198	.589	.032	-.240
地域に歴史的景観がある	.094	.555	.125	-.293
最近新しい商業施設ができた	.026	.498	.103	.148
地域の図書館が多く利用されている	.074	.459	.127	.014
耕作放棄地や放置森林が多い	.093	.451	-.364	-.331
上下水道が整備されている	-.063	-.020	.849	-.129
道路が整備されている	.076	-.045	.834	-.165
まちなかが整備されている	.193	.020	.732	-.051
公共交通が整備されている	-.060	.088	.714	.109
長距離の移動手段が確保されている	-.059	.210	.625	.102
インフラの工事が行われている （最近行われていた）	.114	.315	.363	-.049
医療環境が整備されている	.339	.110	.354	.006
人口減少が進んでいる	.038	.076	.041	-.764
若い人材が流出している	.084	.019	.043	-.609
若い人が多い	.137	.255	.002	.556
高齢者が多い	-.107	.079	.281	-.544
人口が多い	.057	.204	.168	.520
放置された空き家が多い	.081	.275	-.136	-.466
小中学校の統廃合が進んでいる	.131	.370	.008	-.390
地域がにぎわっている	.264	.309	.028	.383
人が集まり、交流している	.251	.281	.050	.372

構造を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った（表-6）。回転前の3因子で16項目の全分散を説明する割合は64.011%であった。

第一因子を構成する2つの因子のうち1つ目は12項目で構成されている。その内容は「住民が主体的に活動している」「地域の活動が熱心に行われている」「地域に対する信頼がある」「住民同士のつながりがある」のように地域のソーシャル・キャピタルのイメージに関係する

表-6 第一因子の因子分析の結果

項目内容	I-I	I-II
住民が主体的に活動している	.894	-.029
地域が誇りをもっている	.854	-.027
地域の活動が熱心に行われている	.850	.034
住民が地域の将来を考えている	.825	.001
地域に対する信頼がある	.763	.040
地域の中に多様性がある	.756	-.017
住民同士のつながりがある	.678	.031
市政に信頼がある	.649	.196
地域はこのエリアの中心のまちである	.644	.033
NPO活動が行われている	.631	.100
地域の政治家が熱心に活動している	.426	.350
選挙の投票率が高い	.376	.293
地域行政が熱心に雇用確保に取り組んでいる	-.053	.897
地域行政が熱心に福祉に取り組んでいる	-.118	.887
地域間の連携が行われている	.219	.597
住民と自治体が協働している	.251	.586

表-8 SRV、地域イメージ尺度間の相関分析

	SCイメージ	地域行政の取り組み	地域アイデンティティ	インフラ整備水準	地域人口特性
SRV	.813**	.627**	.628**	.599**	.607**

**p<.01 n=600

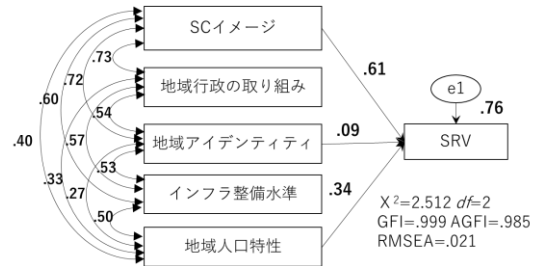


図-2 SRV、地域イメージ尺度に関するパス解析 (パスの上の数字は標準偏回帰係数を、変数の上の数字は決定係数R2を示す)

表-7 因子名、尺度毎の信頼性係数、基本統計量

因子No	因子名	α	M	SD	尺度名	α	M	SD
I-I	SCイメージ	.94	2.75	0.68	SRV	.81	2.82	0.88
I-II	地域行政の取り組み	.88	2.83	0.67	生活SWLS	.93	18.6	6.56
III	地域アイデンティティ	.85	2.73	0.69	生活AWB	.86	2.31	4.42
IV	インフラ整備水準	.89	3.22	0.76	主観的健康感	.86	3.08	1.07
V	地域人口特性	.78	2.85	0.59	地域愛着度(合計)	.96	9.77	2.63
					(選好)	.94	3.34	0.89
					(持続願望)	.87	3.17	1.01
					(感情)	.93	3.26	0.95

表-9 単回帰分析結果

独立変数	従属変数							
	生活AWB				生活SWLS			
	B	β	t	p	B	β	t	p
定数	-4.172		-6.982	.000	10.715		11.706	.000
SRV	1.485	.287	7.331	.000 ***	2.402	.302	7.742	.000 ***
	r=.287, R²=.082				r=.302, R²=.091			
	主観的健康感				地域愛着度			
	B	β	t	p	B	β	t	p
定数	2.074		14.879	.000	4.409		11.706	.000
SRV	0.357	.296	7.567	.000 ***	1.904	.640	7.742	.000 ***
	r=.296, R²=.087				r=.640, R²=.409			

***p<.001, n=600

と思われる項目が高い因子負荷量を示していた。これより「ソーシャル・キャピタルイメージ (SCイメージ)」因子とした。2つ目の因子は4項目からなり、「地域行政が熱心に雇用確保に取り組んでいる」「地域行政が熱心に福祉に取り組んでいる」などの地域行政に関係する項目が高い因子負荷量を示していた。そこで「地域行政の取り組み」因子とした。第二因子は11項目で構成されており、「地域特有の産業がある」「地域のプロスポーツチームがある」「地域に特有の文化・芸術がある」などの地域の特性やアイデンティティに対する評価項目高い因子負荷量を示していた。そこでこの因子を「地域アイデンティティ」因子とした。第三因子は7項目で構成されており、「上下水道が整備されている」「道路が整備されている」「公共交通が整備されている」などのインフラ整備の程度に対する評価項目が高い因子負荷量を示していた。これより「インフラ整備水準」因子とした。第四因子は9項目で構成されており、「人口減少が進んでいる」「若い人が多い」「人が集まり、交流している」「地域がにぎわっている」などの住民の人口や年齢、それに伴う地域のにぎわいに関する評価項目が高い因子負荷量を示していた。そこでこの因子を「地域人口特性」因子とした。それぞれの尺度の信頼性係数は十分な値であった (表-7)。

次に、SRVと地域イメージ尺度の関係を検討する為、各尺度を構成する質問項目の平均点を尺度得点とし、両尺度間の相関分析を行った (表-8)。分析の結果、すべての地域イメージ尺度とSRVの相関が統計的に正に有意であった。さらに、因果関係を検討するためパス解析を行った (図-2)。分析の結果、適合度が十分な水準となったモデルでは地域イメージ尺度のうち「SCイメージ」「地域アイデンティティ」「地域人口特性」がSRVに直接有意な影響を与える可能性が示された。SCイメージの標準化係数が最も大きく、地域住民は直接的には地域内の住民のつながりや信頼、熱心さなどのソーシャル・キャピタルの認知が地域活力イメージの形成に大きく影響を及ぼし、若者人口の流動や地域特性なども地域活力の形成に影響を及ぼしているのではないかと想定される。

5.2 SRVの住民の心理への影響の検討

SRVが心理尺度に及ぼす影響を検討した。まず、地域愛着の3つの下位尺度得点の合計値を地域愛着度とした。それぞれの尺度の基本統計量を表-7に示す。次にSRVと生活AWB、生活SWLS、主観的健康感、地域愛着度の各尺度間で相関分析を行った。その結果、全ての相関係数が正であり、統計的に有意であった。SRVがこれらの要素

に正の影響を与える可能性を示唆する結果であると考えられる。その後、それぞれの心理尺度を従属変数、SRVを独立変数とする単回帰分析を行った(表-9)。その結果、すべての想定された関係においてSRVの正の影響が統計的に有意である結果が得られた。特に地域愛着度に関しては決定係数の値と標準偏回帰係数の値が比較的大きく($R^2=.409$ 、 $\beta=.640$)、SRVが地域愛着度に大きく影響を与えようと考えられる。居住地域に対して地域の活力があるという地域イメージが高い住民ほど、主観的幸福感、主観的健康感、地域愛着が高い可能性を示唆する結果であると考えられる。

5.3. 地域への認知が及ぼす影響について

最後に補足的な分析として、住民の地域への認知度がここまでのSRV、主観的幸福感、主観的健康感、地域愛着度の関係に影響を及ぼすかの検討を行った。地域のことを認知していない場合、地域イメージの質問に対しての回答を行うことが困難であることが考えられる。本研究ではSRVと地域イメージ尺度の候補項目を検討する際、地域のことに1:全くそう思わないから5:とてもそう思うの5件法で尋ねた。この場合、地域のことを認知していない回答者は1と5の間である3(どちらもいえない)に回答が偏る可能性が考えられる。少なくともある質問に対して3以外に回答した場合、地域に対して何らかの認知を持っていると考えることができるであろう。もちろん、地域のことを認知したうえで、中間的な評価をする回答者も存在すると想定されるが、地域のことをよく認知した回答者がほとんどの項目に中間的な評価をするとは考えづらい。

そこで、3(どちらもいえない)と多く回答する傾向の回答者を抽出するため、まず、回答者毎のSRVと地域イメージ尺度候補項目に関する質問に対して3(どちらもいえない)で回答した数の合計値を「中間評価スコア」として算出した。その後、中間評価スコアによって回答者を均等3分割した。以下にそれぞれの基本統計量を示す(表-10)。中間評価スコアが低い順にそれぞれ低群、中群、高群とした。中間評価スコアが低い低群は質問に対して「どちらもいえない」以外の何らかの回答を行った傾向が比較的大きく、中間評価スコアが高い高群は「どちらもいえない」を回答した傾向がある群であるといえる。これより、低群は地域を比較的大きく認知している傾向を持つ群、高群は地域のことを認知していない傾向を持つ群ではないかと推察される。

次に、それぞれの群に対して5.2で行ったSRVを独立変数、心理尺度を従属変数とした単回帰分析を行った(表-11)。その結果、すべての分析において標準偏回帰係数、モデルの決定係数が高群から低群にかけて段階的に上昇していた。特に地域愛着度に関してはその上昇

表-10 中間評価スコアの基本統計量

	中間評価スコア	n	M	SD
低群	0~17	211	8.94	5.36
中群	18~30	191	23.47	3.60
高群	31~51	198	38.97	5.38

表-11 地域の認知による回帰分析の結果の差異

	独立変数	従属変数							
		生活AWB				生活SWLS			
		B	β	t	p	B	β	t	p
低群 (n=211)	定数	-4.066		-5.168	.000	10.527		8.681	.000
	SRV	1.578	.372	5.792	.000 ***	2.296	.354	5.469	.000 ***
		$r=.372, R^2=.138$				$r=.354, R^2=.125$			
		主観的健康感				地域愛着度			
		B	β	t	p	B	β	t	p
定数		2.145		12.523	.000	4.556		11.943	.000
SRV		.367	.394	6.194	.000 ***	1.883	.702	14.256	.000 ***
		$r=.394, R^2=.155$				$r=.702, R^2=.493$			
中群 (n=191)	定数	-3.535		-2.990	.003	11.491		6.250	.000
	SRV	1.305	.235	3.320	.001 **	2.207	.254	3.611	.000 ***
		$r=.235, R^2=.055$				$r=.254, R^2=.065$			
		主観的健康感				地域愛着度			
		B	β	t	p	B	β	t	p
定数		2.099		7.210	.000	4.279		7.266	.000
SRV		.347	.253	3.589	.000 ***	2.011	.599	10.273	.000 ***
		$r=.253, R^2=.064$				$r=.599, R^2=.358$			
高群 (n=198)	定数	-6.198		-2.493	.014	8.282		2.212	.028
	SRV	2.011	.169	2.394	.018	3.328	.185	2.631	.009 *
		$r=.188, R^2=.035$				$r=.185, R^2=.034$			
		主観的健康感				地域愛着度			
		B	β	t	p	B	β	t	p
定数		1.414		2.333	.021	3.739		3.914	.000
SRV		.548	.188	2.676	.008 *	2.039	.411	6.320	.000 ***
		$r=.188, R^2=.035$				$r=.411, R^2=.169$			

***p<.001, **p<.005, *p<.01

が顕著であった(高群： $\beta=.411$ $R^2=.169$ 、中群： $\beta=.599$ $R^2=.358$ 、低群： $\beta=.702$ $R^2=.493$)。この結果は地域の認知が存在することで、SRVの住民心理への影響が大きくなる可能性を示唆する結果であり、住民が地域に活力あるという地域イメージを持つだけでなく、それ以前に地域のことを知るといふ別の条件が幸福感・健康感・愛着等の心理を涵養するうえで重要であるのではないかと考えられる。

6. おわりに

本研究では、住民の主観的指標、地域への印象を用いて「地域の活力」の性質と影響の検討を行った。地域の活力の性質については、まず、新聞記事データを用いたテキスト分析により「地域の活力」と強く関連する語で構成された地域評価尺度候補項目を作成した。作成した51項目を用いたアンケート調査を行い、得られたデータの分析を行った。尺度を構成するための因子分析により「SCイメージ」「地域行政の取り組み」「地域アイデンティティ」「インフラ整備水準」「地域人口特性」因子が抽出され、主観的な地域の活力に影響を及ぼ

す住民の地域へのイメージが5つのまとまりとして存在することが示唆される結果が得られた。次に、5つの因子と「地域の活力」尺度間で相関分析を行ったところ、有意な正の相関が示された。また、それらの因子がSRVに及ぼす影響を検討し、「SCイメージ」「地域アイデンティティ」「地域人口特性」が「地域の活力」に統計的に有意に影響を及ぼす可能性が示された。住民間のつながりや住民の主体性、地域が持つ特有性、地域が若い人々でにぎわっているというようなイメージがSRVに影響を及ぼすと考えられる。逆に「地域行政の取り組み」「インフラ整備水準」についてはSRVに直接的影響を持つことを示す結果は得られなかった。行政の取り組みやインフラ整備水準のイメージの差は地域活力イメージの高低に影響していない可能性が示唆される。

地域の活力の効果についてはSRVが住民の主観的幸福感、主観的健康感、地域愛着等の心理尺度に対して持つ影響について検討を行った。心理尺度を従属変数、SRVを独立変数とした単回帰分析を行った結果、すべての影響関係が統計的に有意であった。特にSRVが地域愛着に与える影響が大きい可能性を示唆する結果が得られた。引地(2009)¹²⁾は住民の地域への高い評価が地域愛着を形成することを指摘している。SRVは地域への肯定的な評価であると想定され、地域愛着へ影響を及ぼすと考えられる。

最後に住民の地域への認知度がSRVと主観的幸福感・主観的健康感・地域愛着度の関係に及ぼす影響の検討を行った。地域イメージに関する質問項目にどちらでもないという回答した数を算出し、分析を行った。その結果、中間の評価が多い回答者はそうでない回答者と比較して偏回帰係数や決定係数が低かった。住民の地域への認知の水準によってSRVの住民の心理への効果の程度が異なる可能性の存在が示唆される。地域のことを知る、あるいは知っているかと思っていることが、地域に活力があるという事態を自己の幸福や主観的な健康につなげるための一つの条件である可能性が示されたといえる。すなわち、地域のことをよく認知した住民が多い地域では、活力ある地域ほど個人の幸福や健康、愛着が高い住民が多い一方、地域のことをよく認知していない住民が多い地域では、活力があっても個人の心理に及ぼす影響が低くなると推察される。パネルデータを用いた因果関係の検討が必要であると考えられるものの、地域の活性化によって個人の活力を向上させようと企図するのであれば、住民が地域のことを知るということが要件となると考えられる。

また、地域の認知を厳密に示す指標を用い、調査を行っていない点も課題である。今回の分析はどちらでもない、の回答が質問項目について認知していないことを示すと仮定し行った。しかし、どちらでもないという回答した

場合でも回答者が実際に地域のことを認知し、判断した可能性が存在する。今後の調査では「知らない」などの回答を設け、より厳密なデータを取得する必要があるであろう。

以上のように本研究では、SRVの性質と効果について検討を行った。今後、この知見を実際の地域評価、事業評価に用いるために、抽出された5つの地域イメージが具体的にどのような条件によって認識されるのかを検討する必要があるであろう。また、今回はSRVが地域愛着に比較的大きな影響を及ぼすことが示唆される結果が得られた。しかし、石見・田中(1996)⁴⁾が示すように地域イメージは人々に対して様々な影響を及ぼすことが考えられ、その他の心理状態や態度に関しても続けて検討を行う必要があるであろう。

参考文献

- 1) 藤井聡(2015)『土木計画学 公共選択の社会科学』学芸出版社
- 2) 河上牧子(2005)「『地域力』と『ソーシャル・キャピタル』の概念に関する計画論的一考察」都市計画論文集40.3(0), p205-210.
- 3) 湯沢昭(2011)「地域力向上のためのソーシャル・キャピタルの役割に関する一考察」日本建築学会計画系論文集76(666), p1423-1432.
- 4) 石見利勝 田中美子(1996)『地域イメージとまちづくり』技報堂出版株式会社
- 5) 樋口耕一(2011)「現代における全国紙の内容分析の有効性:—社会意識の探索はどこまで可能か—」行動計量学38(1), p1-12.
- 6) 見田宗助(1979)『現代社会の社会意識』弘文堂
- 7) 樋口耕一(2006)「内容分析から計量テキスト分析へ—継承と発展をめざして」大阪大学大学院人間科学研究科紀要32, p1-27.
- 8) 挾本佳代(1992)「スパンサーにおける社会有機体説の社会学的重要性—群相としての社会と人口—」社会学評論48(2), p192-206.
- 9) 林良嗣 土井健司 杉山郁夫(2004)「生活質の定量化に基づく社会資本整備の評価に関する研究」土木学会論文集(751), p55-70.
- 10) 北川夏樹 鈴木春菜 中井周作 藤井聡(2011)「共同体からの疎外意識が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究」土木学会論文集 D3, 土木計画学67(5), L327-332.
- 11) 藤南佳代 園田明夫 大野裕(1995)「主観的健康感尺度(SUBI)日本語版の作成と、信頼性、妥当性の検討」健康心理学研究8(2), p12-19.
- 12) 引地博之 青木俊明 大淵憲一(2009)「地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響

一」土木学会論文集D 65(2), p101-110.

13) Kahneman, D. (1999) .Objective happiness. In Kahneman, D., Diener, E., & Schwarz, N(Eds.), Well-Being: The foundations of hedonic psychology(p.3-25). New York: Russell Sage Foundation.

14) 北川夏樹 (2010) 「交通行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究」京都大学卒業論文.

15) Diener, E., Emmons, R.A, R.J, Griffin(1985). The Satisfaction With Life Scale. Journal of personality Assessment, 49,1.

16) Pavot, W., & Diener, E., (1993). Review of the satisfaction with life scale. Psychological Assesment, 5, 164-172.

17) 横山忠範 (2015) 「高齢者の主観的健康と身体的・精神的・社会的資源について：全国調査データの計量分析」北海道大学大学院文学研究科研究論集 (15), p289-306.

18) 鈴木春菜 藤井聡 (2008) 「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する影響」土木計画学研究・論文集 25, p357-362.

19) 大谷華 芳賀繁 (2003) 「地域交通環境の利用が高齢住民の地域環境に及ぼす影響」立教大学心理学研究 45, p1-9.

20) 萩原剛 藤井聡 (2005) 「交通行動が地域愛着に与える影響」土木計画学研究・講演集.